

<研究ノート>キャリアデザイン学を学ぶ(その一) : キャリアデザインの時代再考 I

KOKADO, Hiroyuki / 小門, 裕幸

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

157

(終了ページ / End Page)

170

(発行年 / Year)

2017-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013921>

キャリアデザイン学を学ぶ（その一）

（キャリアデザインの時代再考 I）

法政大学キャリアデザイン学部教授 小門 裕幸

教員生活を振り返り、「キャリアデザイン学を学ぶ」と題して書いてみたいと思う。第一回目は、「キャリアデザインの時代再考」がテーマである。

本稿では、キャリアデザイン学が求められている現代という時代について考えてもらうために様々な論点を提供する。一つは、キャリア研究という学問についてである。キャリア研究の本場米国では、この20、30年間すさまじい社会の変化の中で人々の生き方、とりもなおさず働き方において大きな変化が起きている。1970年代80年代に成立したキャリアに関する学問に、どのような変化が起きたのか。キャリア研究の泰斗であるエドガー・シャイン及び2007年に出版されたキャリア研究ハンドブックの編者であるガンツとパイパールの見方を紹介する。もう一つは、右肩下がりに転じた日本社会に焦点をあてて、キャリアデザイン学について、どのような時代背景の中で誕生し、その時代がどのような歴史的節目にあるのか、そしてどのような問題をかかえているのか、いくつかの材料を提供してみたい。具体的には、

- 米国キャリア研究の今
- ICTの進化の行方
- 「日本人と近代」再考
- 明治140年戦後70年という時代認識とグローバルな視野を持つ有力人材の払底
- 日本経済の衰退論とキャリアデザイン
- 高学歴低学力論と教育制度への危惧
- そして、世界史の歴史的な大旋回

などである。

これらの論点を理解することは、とりもなおさず、キャリアデザイン学が、日本人にとって求められる学問であることを証明することであり、同時に、自分の人生を自分の力で生きて行こうとする学生にとって必須のものである。

今回の紀要の内容は次の通りである。

- I、米国キャリア研究の今—だからキャリアデザイン学は重要だ—（HBR）
 - 1、キャリア研究ハンドブックとハーバードビジネスレビュー
 - 2、キャリア研究ハンドブックにみるキャリア研究のその後—個人化と組織の衰退：キャリアデザインが重要だ—
 - 1) エドガー・シャインはどうみているか。
 - 2) 編者ヒュー・ガンツとモーリ・パイパールはどうみているか。
- II、「日本人と近代」再考—だからキャリアデザインが必要だ—
 - ・明治140年戦後70年という時代の節目
 - ・分断する世界
 - ・同質社会とその共同体の崩壊
 - ・江戸時代の村落共同体／町長屋共同体
 - ・明治維新という文明破壊と天皇国家共同体への転換

- ・ 会社共同体への華麗なる転身
- ・ 一極集権構造と人材移動
- ・ 大企業組織の凋落
- ・ 律儀な日本人とイノベーション、そして生き方改革
- ・ 最近の若者と大学教育
- ・ 同質社会とところの近代化
- ・ 冷戦後とグローバル化 不安定な時代という現実
- ・ 四つの我が国の問題点
- ・ 日本人が陥りがちな五つの主義
- ・ 三段飛び人材育成は可能か

I、米国キャリア研究の今—だからキャリアデザイン学は重要だ—

1、キャリア研究ハンドブックとハーバードビジネスレビュー (HBR)

まずは、米国のキャリア研究に関して、である。私は、2012年、『キャリアデザインという自己変革・社会変革』を上梓させていただいた。それはキャリアデザイン学部創設時からこの学部に属し、2007年夏に“*Handbook of Career Studies*” (キャリア研究ハンドブック) という六百三十ページにわたる大作をそれなりに読破し、米国で行われているキャリア研究について、概ね全体骨格を理解することができたからであり、また、同時に私たちが目指すキャリアデザイン学が、当初私が考えていたものに比べ、はるかに広汎で壮大で今の日本にとって意義あるものだと確信したからである。

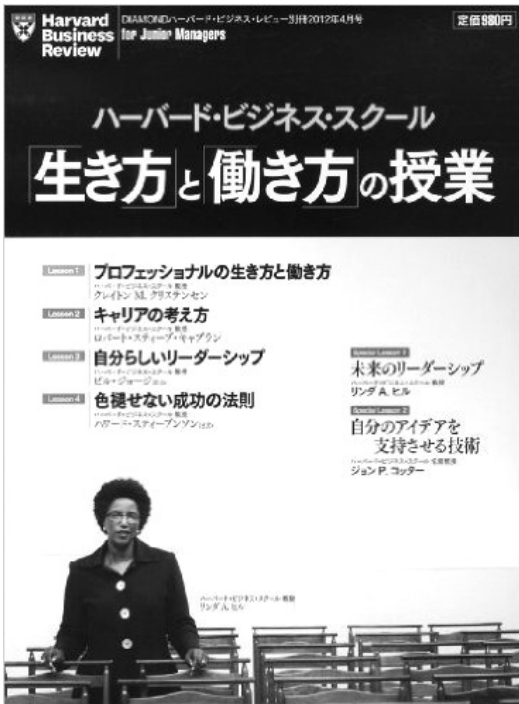
米国ではキャリア研究が混迷している。それは、キャリアという概念が普及しすぎたからである。時代が米国の経済・産業構造をゆさぶり、米国の人々の生き方が多様化し、複雑化したからである。女性の進出、高齢者の台頭など、キャリアの裾野が拡大している。そのような状況の中で研究者も様々な悩みを吐露している。とりわけ、私に関心を持ったのは、個が人生をどのように生きるかということの重要性を、彼らが再認識し、真の学問

としては、キャリアや企業経営を巡る実証研究だけでは不十分であり、人文学的な研究に踏み込まざるを得ないと感じているように思えたことである。

経営学の分野においても同様の現象が起きている。ハーバード大学のビジネススクールの教授、クレイトン・クリステンセン (Clayton M. Christensen) は『イノベーションのジレンマ』で華やかなデビューを飾った人気教授その人であるが、彼が「生き方と働き方」の授業を始めている。それは、ビジネススクールの卒業生の多くが人生に挫折し、彼のところに相談に来ているからである。彼は見るに見かねての人生講義を開始する。OBたちは、米国の経済界のリーダーとして華やかなビジネスマン生活を送っていたエリート中のエリートである。彼らに対してクリステンセンが、いわば「キャリアデザイン学」の講義をしていたのである。彼が敬虔なモルモン教徒であることが影響したのかもしれないが、ビジネスや企業戦略を研究する傍ら、それを行う人間についての洞察を深めていることには敬意を表したい。

その彼が2012年4月のHBR(増刊号、写真参照)で、「生き方」と「働き方」の授業と題して、特集を組んだ。さらに同年、共著で、“*How Will You Measure Your Life?*” (Clayton M. Christensen, HarperCollins, 櫻井祐子訳『イノベーション・オブ・ライフ —ハーバード・ビジネス・スクールを巣立つ君たちへ—』翔泳社、2012) を出版している。ハーバード・ビジネス・スクールは米国経営学の総帥といってもよい。企業の生死の問題は扱うが、人生の生死にかかわる人生についての講義が欠落していることに気づき、生き方と働き方の講義が始まったのである。時代のうねりは大きく、米国の人々は翻弄され、救いを求めているのである。

ハンドブックについてさらに敷衍すると、同書は2007年に、米国の経営学学会のキャリア部会として気鋭の若手研究者が、編者となって、取りまとめ出版された。学問的には特異なハンドブックとなったようだ。それは、両編者がビジネス



界からの転身であること、そして研究対象がおおむね米国、とりわけ東海岸であるにも関わらず、スイスのローザンヌのIMD (International Institute for Management Development、国際経営開発研究所) において取りまとめられたことである。さらには、前回のハンドブック出版から数えて約20年が経過しており、表題も前回のCareer TheoryからCareer Studyに変遷している。そして、この分野の大御所シャインが「はじめに」と「あとがき」に登場していることである。

キャリアという言葉が様々な分野で使われるようになり、編者はキャリア研究という学問領域確定に多大な努力をされている。このことが、くどいようであるが、この間の世の中の大きな変化があったことを物語っている。

翻って、日本のことを考えるに、より時代の変化の度合いが大きく深刻であると言わざるをえない。世界の時代の大きなうねりに加え、日本自身が歴史的に見て大きな曲がり角にきている。それは、寄らば大樹の陰、従来のように大船に乗って安心安全、ひたすら律儀に努力すればよいという

常識が消失し個々人が舵を取らないといけないう状況となったということ。それは個においてキャリアデザインをすることが必須になったということである。キャリアデザインのレゾナントルはここにある。日本は、米国以上に、変化のマグニチュードが大きい、社会の枠組みに加えて個人において三段飛びの大変身を遂げないといけなからだ。キャリアデザイン学の必要性は極めて高い。必須となった。

2、キャリア研究ハンドブックにみるキャリア研究のその後—個人化と組織の衰退：キャリアデザインが重要だ—

時代が変わった。まずは、現在のキャリア研究の本場の米国における、研究者のキャリア研究に対する認識そして研究者の他のキャリア研究者に対する意識などをハンドブックにおいて確認しておきたい (2007)。

1) エドガー・シャインはどうみているか。

エドガー・シャインは、キャリア研究ハンドブックの「はじめに」(foreword)を「キャリア研究—個人的な視点—」と題して、書き始めている。「私は、ムーア、ガンツ、ホール諸氏の手による優れた、この歴史的書となる「はじめに」において、その内容を紹介するが、その細部に立ち入るわけではない。あくまでも一人の研究者としていくつかのコメントをすることにとどめたい」。彼は、彼の長年のキャリアダイナミクス研究の個人的な経験に基づいて、この記念碑的ハンドブックを熟読して感じたことや気づき(リアクション)を述べている。彼の提起する問題はハンドブックの中の章でも取り上げられているが、この短いエッセイというべき「はじめに」の中に凝縮して彼の想いが述べられているように思う。分析・評価ではないが、彼の半世紀にわたる観察に基づくコメントであるがゆえにポイントをついていて面白い。

(成長と多様化)

最初のコメントはキャリア研究分野(field)の成長と予想外の多様化である。キャリアの研究者

はキャリア研究の深まりと拡大について認識すべきであり、そのために、この本の章立てを確認する必要があると指摘する。曰く「キャリアという概念が、世界がグローバル化し複雑化し多様化し、そして最も重大なことであるが同時に個人化が進行している中で、これまで以上に重要なものとなっている。そしてそれは健全なことである。経済の発展は個人化をもたらし、同時に組織の衰退を招来している。組織とは個々人のキャリアを管理していたところである。それが、個々人がそれぞれのキャリアについて多くを語るようになった。彼らは彼らのキャリアに責任を持つべきであると思いはじめている。これもきわめて正常な変化である。なぜなら、組織は昔のように個々人のキャリアパスを予測しコントロールすることができなくなっているからである。それは現実である」。シャインも社会の変化の中でキャリアがオブジェクティブキャリアからサブジェクティブキャリアに重心が移っていることを認めている。米国終身雇用の崩壊を前提にしてエリート層に対する従来のキャリア理論の適用や普遍化が難しいと感じているようである。社会の個人化と組織の衰退。マネージャ不要の経営といわれるホラクラシの議論さえ始まっている昨今、ますます個人への傾斜が強まっていくのであろう。

シャインは続けて、「この本で取り上げているテーマ（トピックス）は多種多様である。そして研究方法もまた多様化している。それも健全なことである。この本の各章を精読するとディシプリン（学問分野）の異なる人が参加していることがわかる。これまでキャリアという概念に関心のあった心理学や社会学の人たちに加えて、文化人類学や経営学の分野で関心ある人が増え領域としての裾野を広げてきている。臨床的手法で研究を進める人たちも参加している。それは歓迎すべきことである。彼らは時間の経過の中でのキャリアの内部ダイナミクスを明らかにしてくれる。その研究方法は個々人のキャリアの研究だけでなく働く（work）ということの本質をより身近なものにしてくれる。それらはこれまでキャリア研究の

中でネグレクトされてきたものである」とこの本に対する評価が高い。

キャリア研究は、1960年代トンプソン、ダルトン、ダー、ドライバー、ベイリン、ヴァンマーネン、シャイン、ルイヒ、ブレイ、ストーリー、ハーレルそしてその他多くの人たちの努力により、その分野を飛躍的に拡大した。それらの研究は統合されず、二、三の個人発達理論のパラダイムが全体を支配していたとシャインはみている。その理論家にはスーパーやホランドなどがいるが、学問的統合の欠如という問題は、それ自体が問題というのではなく、パラダイムの異なるリサーチャーたちがそれぞれの特定分野の仕事が最終的なものであり、それを正しいものであると認識をし、研究を完結させていることが問題なのであるとしている。シャインは、このハンドブックが明確にそのような領域主義（provincialism）を乗り越えている点を評価している。

曰く、「そのために編者たちはPart IIIを設け、統合を意味あるものとすべく複数の章をセットしてそこに委ねることにしている。キャリア研究において統合が欠如しパラダイムが複数存在する状況にあるのは多様化が進展したことの証であり、人気のある研究分野が避けては通れない宿命でもある」としている。

（異なる発達時期と年齢におけるキャリアダイナミクス）

シャインは歴史についても語っている。「キャリアリサーチはいくつかの新しい手法の出現により拡大した。かつて第一次大戦時代、それはパイロットの選抜方法の研究を行うことであった。丁度テストングの存在が認知され始めたころで、ある職種にある特定の特徴を見いだすなど、確たる基準（criteria）を持ち著しい成功を収めた時代であった。長い間キャリアの研究は会計のような職務要件（job requirement）が明確な場合に限られていた。職務が十分に説明できない場合でも、少なくとも対象者のキャリアが成功者のプロフィールにマッチするかどうかを比較することはできた。職業関心アセスメン

ト (Strong Interest Inventory) が研究を支配した時代であった。このハンドブックの多くの章で示しているように今考察すべきたくさん職業 (occupation) が出現している。このテストング・セレクションモデルは他のキャリア研究の手法により補完されて、なお生きている。特に管理職の選抜に関しては、研究者は、管理職は何をするのか、そしてどのようなスキルが管理職という仕事を効率的にするのかが明らかでない、管理職のキャリアの成功に結び付ける (を設計する) ことは難しいということ認識しておかねばならない。私たちは多種多様な“コンピテンシーモデル”を試みたが、徒にコンピテンシーのリストが数百に増えただけで昔のテストングの手法に比べ有意に優れているとはいえる状況にはまだない。コンピテンシーモデルについては警鐘を鳴らしておかなければならない。組織が複雑化するにつれ多くの新しいキャリアの形態が可能となり、また多くの女性がキャリアに進出するに伴い、より多くのキャリア成長 (growth) のパターンが見えるようになってきた。とりわけレイソンのスローバーン (slow burn) という概念が有名である (Bailyn 1993)」。とりわけコンピテンシーモデル万能主義に警鐘を鳴らし、女性のキャリア進出による新たなキャリア論の展開についても期待している。

さらに彼は、「キャリア研究はセレクションモデルを越えて進化し、今や中年キャリア (mid-career) や後年キャリア (late-career) の問題が浮上している。初期のキャリア研究はキャリアを職業というラベル (occupational label) としてみていた。このハンドブックの読者はお分かりになると思うが一つの職業 (occupation) のキャリアダイナミクスに焦点を置くことが重要であり、あるキャリアから他のキャリアへ、退職も含めて、キャリアの移動 (moving) が現実化し心理的な多くの重要な問題を提起しており、それらは研究対象として注目を浴びている」とキャリアのダイナミクスについて自論を展開する。
(社会経済的バリエーションと後年キャリア)

シャインは、このハンドブックで検討されている中年キャリア (mid-career) と後年キャリア (late-career) の研究はキャリア研究の進歩と多様化の端緒を開くもので、すでに多種多様な研究も始まっている事実を高く評価している。しかしながら、シャインたちにとっては、経済水準 (socio-economic level)、文化、ジェンダーや年齢のコンフォートなど社会経済の多様化について理解を深め拡大することは厳しいことであるようだ。それは彼らのキャリアという概念が組織を離れて独立して生きるような人々を対象にしていなかったからである。この多様化は、かつてのシカゴ学派への先祖がえりの兆候だといえるのかもしれない。シカゴ学派ではE・ヒューズのもとに犯罪者、売春婦、受刑者、ジャズミュージシャン、泥棒、組立工など社会の下層階級を代表するような人たちについて研究していた。それがこの学派の伝統であった。しかし、長期にわたりこの種の研究は中断し、それが今またよみがえり舞台の上を上りつつあるのであると彼はコメントしている。

最後に、彼は、退職者について「60歳、65歳の退職から死を迎えるまでの期間に異なるキャリアを形成する余地が生まれていることを指摘している。アリゾナやテキサスなどのサンシャインベルト地帯に移動して単にゴルフ三昧ということではない。それは、それぞれが新しい能力や機会を発見することであるとし、そこで職を得る可能性もある。そして職業的に活性化していることが肉体の健康にも良いということ踏まえ、新しい人生の過ごし方 (new life routines) を教えることが一つの産業の誕生をも意味している」と結んでいる。

(結論)

「良いニュースはキャリア研究の分野がなお生き続けうまくいっているということである。この分野は成長著しく熱狂の中にある。このハンドブックはより深く知りたい人たちにその現実を証明してくれるものであり (testament)、質の高い情報を提供するものである。私がこの「はじめ

に」で指摘しようとしたことはいくつかの見方を提供することであり、またキャリアの分野がなお発展期にありさらに研究ステージを高めるときに遭遇するいくつかの問題に光を当てることにあった」とポジティブに締めくくっている。しかし、キャリア概念の拡散とキャリアの多様化は学問として体系化するには多大な時間とコストと、そして情熱が必要なのではないだろうか。

2) 編者ヒュー・ガンツとモーリ・パイパールはどうみているか。

キャリア研究という分野の現状が出版経緯の中に、赤裸々に描かれているので紹介したい。ハンドブック出版は彼らが思い立ったのではなく、出版社からガンツ（Gunz）への依頼であった。彼らはキャリア研究の統合の必要性を感じていたが、しかしどうすべきかわからなかった。これを契機にガンツはパイパールにコンタクトし、パイパールは大きく息をついて同意したようだ。しかし、結果的には彼らは彼らの手によってこの本が編集されたことは適切だったと考えている。彼ら二人は、特異なバックグラウンドをもっている。ガンツは化学者であり前歴はシェルの技術者で、パイパールはエンジニアでIBM出身であり、PhDを社会科学で修了したことが唯一、この本の編者資格であった。彼らは基本理系の教育を受けており、社会学者として当初から訓練されてきた他の学者とはものの見方が違う。従って、彼らは様々な研究に対して等距離で臨むことができてよかったと述懐し、だからこそ体系化にチャレンジできたのだと考えている。曰く「キャリア研究の対象はロールシャッハ・テストのものだと思っている。序章で議論しているように、キャリアという言葉は“社会的な問いかけに対するものの見方以外の何ものでもない”、漠とした広義のものでしかないという結論に至ったのだ」。キャリア研究は多様化し見る人によって違って見える。キャリア研究のフィールドが広範でその共通項を絞り込むのは難しい。キャリアという言葉が普及し拡散してしまつてとらえどころ

がない。裏を返せば学問として対象とするのはなかなか困難な状況になっているということなのではないだろうか。この本の第一章で、ものの見方（perspective）とは何かについて説明されている。

1989年のハンドブックでマイケル・アーサー、ティム・ホールとバーバラ・ロレンスは「キャリア研究はすべての社会科学と人文科学のしかるべき部分をカバーするものであるとしている」。ガンツとパイパールは「ロールシャッハの心理テストではシミの中に自分が見たいと思っているものを発見することがあると同様に、キャリア研究においても自分自身の研究分野をみつければよいのであるとする。もし君が転職について研究する心理学者であるならば、君はキャリアを職業選択についてまずみることになるのは当然であるし、もし君が社会学者であるならば、同様にキャリアを社会が社会を再生産する基盤（fundamental）であることとみることになるのであろう。他の分野の人たちについても同様だ。ひとたびこの分野で研究を続けると決意すると君たちの見方は拡がり、シニアなキャリア研究者たちがディシプリンを越えた議論を先導しようとするのは偶然でもなんでもないことがよくわかるだろう」と指摘している。

しかし、元科学者やエンジニアだったら社会科学の初期のトレーニングで身に付けるものの見方はできない。したがってインクのシミの読み取り方は予測不可能で極めて広範なものとなる。

「『キャリアは職業選択についての研究である』と誰かが君たちに言うと君たちは「何てすばらしい」と答える。他の誰かが「キャリアは社会の社会的再生産についての研究である」というと君たちは「好奇心をそそられる」と答える。このようなことがキャリアを通じたものの見方についての理解を深めることに明確につながるとは思えない。むしろそれは余計なことかもしれない。しかし、その行為は皆で一緒に働く肥沃なグラウンドを耕してくれると思う。そしてそのグラウンドは人々の様々な考え方（understanding）を結合するのではなからうか。それがこのハンドブックの編集ではないかと思っている」とシニカルなコメ

ントをしている。

II、「日本人と近代」再考—だからキャリアデザインが必要だ—

このテーマについては、拙著『キャリアデザインという自己変革・社会変革』（2012）において取り上げている。それから5年の歳月が流れている。「日本と近代」についての基本的考え方にも大きな変化はないが、欠落していた点、およびその後の状況を踏まえ追加・修正すべき点を補いながら書き直してみたい。

（明治140年戦後70年という時代の節目）

我が国は明治維新以来、約140年、敗戦後70年の大きな節目を迎えた。そして、たまたま、2017年はマルティン・ルターがローマ教会に抗議してヴィッテンベルク市の教会に95ヶ条の論題を打ちつけた、宗教革命と呼ばれる、1517年から数えて500年目の年に当たる。因みにポリシェヴィキ率いるレーニンがトロツキーとともに蜂起し史上初の社会主義政権を誕生させた1917年からも100年目にあたる。変革のマグマが溜っている。

（分断する世界）

今年2017年は世界の分離・分断を決定づける年になるかもしれない。昨年、イギリスはEUから分離独立することを決断した（ブレグジット2016/6）、そして米国国民はドナルド・トランプ候補を大統領に選出した（2016/11）。そして、今年このようなポピュリズムがフランスやドイツをも巻き込んでしまうのではないかと危惧されている。歴史が大きく旋回するかもしれないのである。

人類の進歩の歴史は、近代に入り個人主義と寛容の精神という理念をもって、協調と統合による世界秩序の構築に向けて歩み始めていた。そして20世紀後半、近代が成熟して仕上げにさしかかっていた。ようやくその形が見え始めていたときに、これらの事件が起きた。

日本が明治以降目標としてきたものは、欧米人が生み出した西洋近代と呼ばれるものであり、そして、究極の目標としたものは、日本人には理解しがたい、近代の精神と呼ばれる精神構造であり行動様式ではなかったか。近代という時代は宗教革命と啓蒙主義を経て市民の力で創造されたもので、キャリアデザイン学的には個の自立と個人主義を大きな特徴とする。近代という時代は、その後繰り返される戦争という多大な犠牲の中で進化をとげ、その理念は政治的にも哲学的にも良識ある政界・財界人・知識人においてようやく共有されるに至っている。言ってみれば人類の歩み方として万国万民に提示されていたといっても過言ではない。そこに、赤信号が灯った。

（同質社会とその共同体の崩壊）

「文化一元の同質社会であることを優先する」。

日本はそのような価値観を共有した人々による社会を完成させていた。市井の歴史学者渡辺京二はそれを江戸文明と表現した。

明治維新は江戸文明を資本制市民社会へと変容させる大革命であった。それは激烈な社会・経済・政治の枠組の総入れ替えであったといつてよい。市民社会とは契約と合理性によって利害の調整の体系である。江戸時代の人々にとっては、それは理解しがたい／馴染めない／異様なものであったに違いない。社会が法律で整備され、人々はその間に権利・義務を負った国民として位置付けられ（明治期は臣民であったが）、そしてその権利を守るために裁判制度が導入される。共同体的ルールの世界で生きてきた人々には欧米的権利意識を基本にすえる法意識は受け入れ難いものであったろう。

（江戸時代の村落共同体／町長屋共同体）

日本人という人々は麗しい村落共同体あるいは町長屋共同体を基礎に自律的な自治をも生み出し、総体として一つのくにが形成されていた。徳川治世の200余年の閉鎖経済は、完璧なエネルギー循環を創造し、文字通りサステイナブルな社会を完成させ、この国の経済、社会、政治システム、生活文化ともども、秩序ある運営を可能にし

ていた。江戸文明は欧米人がうらやむガーデンシティを生み出し、そこには村落・町長家共同体を基礎とする文明国としての秩序があり、何よりも礼儀正しい律儀な人々がいたのである。

(明治維新という文明破壊と天皇国家共同体への転換)

明治という時代は、そこで暮し始めた人々にとって驚天動地の世界であった。その文明に対し、維新政府は悲しいまでの荒治療を断行する。旧文明をことごとく否定する中にしか日本は生き延びる方法はなかったし、そこには日本改造を強行せざるを得ない歴史の現実があった。日本の村落共同体は明治期維新政府の強力な集権政策のもとに解体の道を歩むことになる。人々の心の拠り所は半ば強制的に神格化した天皇に移行させられる。けなげな日本人のもつ共同体に対する義務感を時の権力は麗しい村落共同体から天皇を頂点とする国家共同体に対する義務感にすり替えることに成功する。明治国家は国家規模に拡大された共同体であり、それは人々の心の中まで蹂躪するものとなったと渡辺は指摘する。そして、彼らの律義さは強力な軍隊を生み出し、日本は、日清・日露、拳句は、勝算のない大東亜戦争に突き進むことになるのである。

(会社共同体への華麗なる転身)

共同体の話をしている。そして、戦後日本人の心の拠り所は会社共同体に移行する。日本人は世界からエコノミックアニマルと揶揄されながらも、経済成長に邁進することになる。日本人の律義さはモノづくりという分野でもいかに発揮される。エズラボーゲルをしてジャパン・アズ・ナンバーワンと言わしめ大帝国を押しつけ世界の製造業市場を席捲する。会社共同体は会社人間や企業戦士などと呼ばれる忠実な人々により支えられ、世界に冠たる組織となり、1890年代からバブル崩壊の1990年代半ばまでの未曾有の繁栄を謳歌することになる。この間日本人は、会社共同体の一員として組織のメンバーとしてその歯車として行動することを求められた。個として自立することもなく自分のキャリアを考える余裕もな

かった。

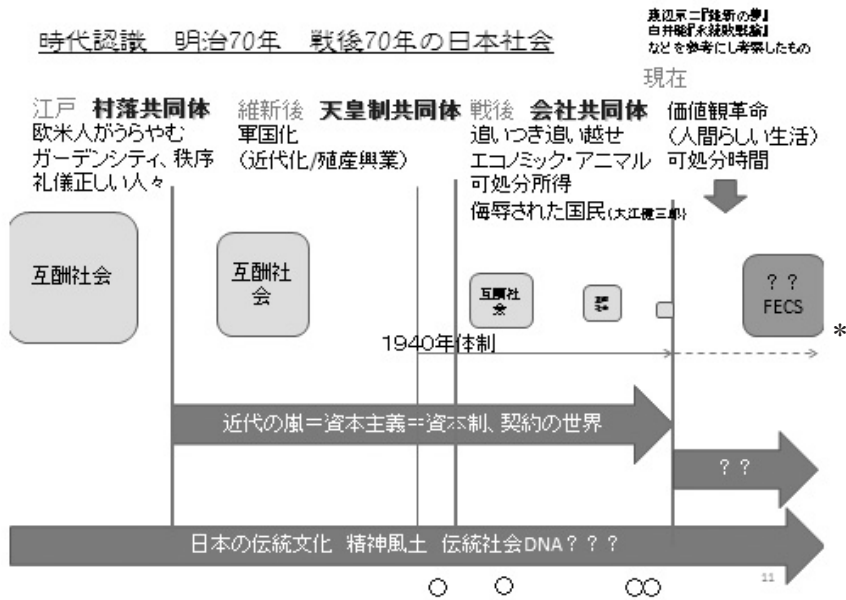
(一極集権構造と人材移動)

戦後、若者は貴重な人材として中枢機能を担った東京に吸い寄せられる。地方は基本的にはものづくりの拠点として位置づけられ、くに全体としては均衡ある発展を志向した。しかし製造業の成功は円高をもたらした地方の工場は閉鎖もしくは海外移転を余儀なくさせられる。地方経済の空洞化が起こる。中央集権型の日本の政治経済システムは、戦後一貫して地方から中央への人材の移動をもたらした。結果、地方の持つ活力や自主性を奪うことになる。

江戸時代は、地域分権型の社会システムの中で地域独自の経営を実現し、地域ごとに完成度の高い互酬共同体社会をつくりあげていた。その互酬共同体は、維新後の中央指令型の殖産興業・富国強兵の合言葉の下、解体が始まり、そして戦後の追いつき追い越せ政策の下、壊滅的な打撃を受けることになる。現在、地域の人口は減少に転じいち早く高齢社会を迎え、おしなべて商店街はシャッター通り化し、一昨年多くの都市において消滅都市という刻印を押されることとなったのである。国策としてまちづくりや地域活性化策が推し進められるが、焼け石に水の如く。功を奏せず、経済衰退の現実に立ち尽くすばかりである。国のシステムも未だ、欧米諸国が採用している補完主義に基づく地方分権に変更されることはなかった。このような分権構造が自発的活力ある地域の経営力を削ぎ、市民活動の基盤をも弱体化させることになった。

(大企業組織の凋落)

一方で、成功体験を拭い去れない大企業は経済構造の激変に対する対応力に乏しく、仮に舵を切っても肥大化した組織の方向転換には時日を要し、時流に乗れない。大企業共同体は総じて往時の勢いはなく、その大組織は蝕まれつつある。躍進する製造業を支えた終身雇用・年功序列制度が揺らぎ、非正規雇用が4割を超え、また女性の社会進出が称揚されるが、それは女性を中核に据えていた戦後の家族共同体の基盤を揺るがすことに



* 日本人が個人主義を理解しフレンドシップ (F) アントレプレナーシップ (E) シティズンシップ (C) スチュワードシップ (S) という行動原理により互いに結びつき、つくられる新しいコミュニティ

帰着している。
(律儀な日本人とイノベーション、そして生き方改革)

維新後 140年、そして戦後 70年、日本は大きな分岐点を迎えている。日本人が創った日本の近代というシステムが手垢に染まりさび付いている。経済産業構造しかり、社会構造しかり、都市構造しかり、国土構造しかりである。品質改善やTQCが声高に叫ばれた時代は終わった。今、世界に伍して戦うためには弛まぬイノベーションが必須となった。人材的にも、素直で協調性のあるまじめな人材というよりも、異能・異質、個性的人材が優先される時代となった。協調・協力・コラボレーションは必要だが、まずはイノベーションを起こせるかである。そのためには日本人の生活の仕方、働き方自体、生き方自体を考えなおさないといけないということだと思ふ。時代は大きな節目を迎えているのである。

もちろん、成熟社会を生きる日本人にも自分の生活を振り返る余裕が出てきている。学生も就社

でなく就職を念頭に、セカンドキャリアを意識した就職活動が行われていると聞く。大企業神話も崩れ始めた。会社人生は10年余を通勤に費やしている。電車人生を嘆く人たちがも現れた。日本人的な働き方に疑念を持つ人も現れている。

日本人の一人当たり国民所得はトップの座を退いて久しく、今や世界 20位、初任給もシンガポールの半額、プログラマーは米国の三分の一とまで言われるようになった。貧乏が実感されるようになっていく。生産性も OECD 加盟 35カ国中 20位と低迷している。働き方が明らかに劣っているのである。ジャパンモデルという成功体験の延長線上には日本の未来はない。我が考えなければいけないのは、働く基盤であり秩序の源泉である家族・家庭・共同体である。それが弱体化しつつあるのである。

日本人を支えてきた互酬社会システムがゆらいでいる。国土計画、都市計画の次元から考え直さないといけないということだ。律儀な日本人の犠牲的精神で国の秩序は保たれてきた。しかし、グ

ローバリゼーションや多民族化 (Diversity) する現実を考えるとこの安寧をもたらしてくれる秩序は崩壊の危機に瀕しているように思えるのである。

(最近の若者と大学教育)

2012年の拙著では「若者はグローバル化の中で激化する競争社会におじけづき、本来知識を習得し研鑽を積むべき大学生活が、社会的モラトリアムを求め、バイトとサークルや旅行などの安易な生活に明け暮れる。そのような傾向が強い。あるいはまた、サブカルチャに沈潜してしまう。本来であれば自分を未来を信じて敢然としてキャリアデザインに挑んでいるはずの若者が、就職という巨大な壁を前にして、呆然と立ちつくすひ弱な学生もふえているのではないか。職業の選択はノーベル賞をとった経済学者フリードリヒ・ハイエクの言をまつまでもなく、若者にとって最大の労苦であるが、それを真剣に考えるだけの学問的基盤が形成されていない。その苦しみに立ち向かうにはひ弱で成熟していない。日本は確かにゆたかな社会になった。しかもそこでは競争を忌避しお互いに優しくかばい合い、男は内にこもり・女子はきらびやかに軀を飾り、モノ志向・ブランド志向に走る傾向が強い。加えて過剰なまでの平等意識が、出現すべき自我を沈潜させ倫理や思想の世界とは無縁の・知的には怠惰で心理的には個が液化化するような危険を学んでいる」と書いた。

現在もその傾向は変わっていない。リア充は就職戦線の好転からその度を増しているのかもしれない。

三点指摘しておきたい。まず低学歴低学力問題である。日本は高学歴社会ではない。確かに過去に比べ大学進学率は高まっている。しかし世界的には修士比率が低く、低学歴社会であるといわれる。ここに日本人の語学力を加えると惨憺たるものである。国際的に通用する人材が少ない。残念ながら、いまだ海外の有力企業の CEO に日本人がいない。また大学生の低学力については言をまたない。国際的に求められている能力との差も大きい。議論が大切といわれる。そのためには知識

人としての教養と知的好奇心が求められる。第二点は、大学での学び方・学びの姿勢である。米国では授業は議論の場である。自分が参加しないと単位がもらえない。日本でも授業スタイルに AL や PBL などが導入されつつあるが、なお講義を視聴するスタイルが太宗である。米国では、学士で卒論レベルの論文を6本書くことが義務付けられ、密度の高い教育がなされている。米国の大学に行くときキャンパスのあちこちで読書に励む学生が目につく。参考文献を読み考えて考え抜かないと論文が仕上げられないからである。かなりの負担を強いている。そのようにして議論する力プレゼンする力話す力書く力が養われる。我々は今競争をしようとしている彼我の大学生をもっと強く意識すべきであろう。三つめは、大学の進級制度だ。ハーバードビジネススクールでは三分の一を落とすと聞く。厳格な学力把握と単位付与を行っていることは事実だ。とにかく単位をそろえさせ卒業させる日本のスタイルは何をかいわんやである。

参考までに、経済産業省は2006年に提唱した社会人基礎力 (職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力) として「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力を提示している。個人主義を基本にして勉学に励む欧米の学生に比べると、日本人はさらなる努力が必要であると感ぜざるを得ない。大学生という時期が自分の人生と真剣に向き合い真の個人主義に目覚める最後のチャンスである。哲学的思考を深めてほしい。オーストリアからきた留学生が「日本人はすぐ群れる。自分たちは孤独の中で本 (哲学) を読むしかなかった」と自分たちとの行動様式の差を指摘していた。日本人は集団にいるせいか、やたら承認欲求が強いのも考えものだ。孤独の中で自分を見つめ学問と向き合う時間をもっと持たないといけない。個人を中心とする世界で生きている学生に比べ、集団が守ってくれるという安心感の中に生きる日本人と比較すると、能力に大きな差がつく。日本人は日本にいる限りハンディキャップを負っていると考えて

よい。

（同質社会とこころの近代化）

文化一元の同質社会という価値観。民族学の権威柳田国男がいうように「日本人は良い意味でも悪い意味でも突出を嫌う。平凡・平穩でいること、つまりは普通であることに価値を共有していた」。しかし、そのような価値観で新しい時代を乗り切ることができるのだろうか。時代はチャレンジ精神をもってイノベーションに突き進む自主自発の個性ある人材を求めている。それは近代という時代が生んだ欧米の精神でもある。これらの日本人は、自我があり、個人を中心として考える個人主義者であり、そして日本人の感性と欧米人的合理性を使い分けられる人材でなければならない。常に自分の人生を問いかける哲学的な人となり、個が孤独であるがゆえに自ら手を伸ばして他者とつながることのできるフレンドシップ溢れる良識ある知識人でないといけないのであろう。そしてもう一点、時間概念をもって思考することが求められる。「今ここ」が幸せという日本的考え方であってはいけない。過去を踏まえ、人生という長い時間スパンで物事を考えることのできる人にならないといけない。

一言でいうと、「こころの近代化」をするということである。日本も、個の自由度が拡大し自己

を相対化し・個の主観性が担保される時代になっている。また、日本人は、物質文明から目覚め、こころ（精神）の文化形成の重要性に気づき、同時に、日本という「くにのかたち」や日本人という世界にまれなる異様な存在について考え始めているのだと思う。これまでの自分ではいけないと思うのであれば、少なくとも自分の人生を真剣に考えキャリアをデザインしなければいけないし、そしてそのために自分の行動基準、行動原理を模索しないとイケない。FECS：フレンドシップ、アントレプレナーシップ、シティズンシップ、スチュワードシップの四つの行動原理を学んでほしい。

（冷戦後とグローバル化 不安定な時代という現実）

冷戦後に始まったグローバリゼーションは、不確定で（決定論ではなくて確率論の世界へ、曖昧な決まり方）、不確定で（何が起こるか分からない乱数表の世界へ）、不安定で（変動幅の増幅）、不均衡な（変数過多で均衡解不定；収束しない、安寧の継続困難）世界に我々を追い込んでいるようだ。決定論ではない、いわゆる複雑系と呼ばれる世界が広がる。現代の世界は、分断・分裂の時代に足を踏み入れているようだ。グローバリゼーションの勢いは衰えるかもしれないが消えること



はない。むしろ社会は、トランプ現象で紛れもなくリスク社会・あるいはプレカリテ社会になったといえる。偉大な社会学者ブルデューの指摘の通り、個は圧倒的な不確実性を前にすると、計画を放棄し行動も起こさない。個は凍結してしまうとっている。だからこそ、欧米では、寛容・包摂 (inclusivity)、感情移入 (empathy) そして、つながり (rapport) を実践できる能力を重視する。

私たちは、自立/自律した個となり、直接、組織や社会・国家・国際社会にコミットすることができるようにならないといけない。それぞれが意見を持ち自分の役割を理解し、そのためのプロフェッショナルリティを磨く努力が必要だ。キャリアデザイン的にいけば、個々人が自らの力でキャリアの選択を行い・自分の人生は自分で創造する強い意志と決意が求められ、幅広い教養に裏打ちされた人間力をつけ専門の柱を打ち立てる逆T字型人間を目指さないといけない。イギリスの社会学者ギデンズ風にいけば、日本人は再帰的に新しい個を形成することが求められているのである。

(四つの我が国の問題点)

しかし、我が国の現状を前提とすると、看過しえない四つの問題がある。一つは、欧米は思想的には既に近代の次のステージである第二の近代、再帰的近代、ポストモダン、虚構の近代とでも呼ぶべき段階にいるということである。欧米人は自ら自由を求め強い個となり近代という仕掛けをつくり上げた。科学と人間の理性を信奉し結果世界を制覇した。その彼らが近代という枠組みに疑念を提示して久しい。個の自立の先にある新しい時代に踏みだそうとしている。しかし、日本はなお近代の精神をさえ消化できていない。新しい時代への準備を早急にいそがないといけない。司馬遼太郎的に言う。「日本人は農奴的存在から脱却できるのか」である。

二つ目は、個の尊厳やそれに基盤をおく自由や民主主義という概念もいまだ未消化であり、同時に自立する自由な個によりつくられる市場の意味をよく理解できないことだ。市場メカニズムとい

う発想でものごとを考えることができないことだ。まだ集団による安易な意思決定が良いと考えている。したがってリーダーシップとは何ぞやということが分かっていない。このままでは、個の自由や民主主義は引き続きお飾りのまま放置され、また未熟な個がグローバル市場の中で欧米人と互して競争することができるのか、という疑念がある。

グローバル経済はそのスピードは落ちるかもしれないが、着実に進むであろう。人材の市場化は止まらない。自我に目覚めず個の自律ができない日本の若者は複雑化する近代の枠組みへ放逐されるのではないかという懸念がある。集団に守られていると信じている若者が突如そこから放逐されるのではないかと危惧される。

三つ目は、そもそも個の自由や自立に相反する根深い日本文化が存在することである。その中で日本人は生きていかないといけないということだ。物理的なムラという共同体は崩壊しても、集団主義に陥りやすいというDNAは払拭されていない。我々はそれを打ち破り、従属・恭順という生き方ではない、シカタガナイともいわない・対等な人間関係を構築して、自立・独立する個が形成できるかという問題である。四つ目は善や正義そして愛についての議論の欠落である。自由で民主的な共同体の場合、その結合の度合いは愛ではかられるのであろうが、その代わり義務という正義が求められる。アリストテレスの議論である。経済学は物の最適配分を考える学問であるが、自由で公正な交換に正義(交換の正義)があると教えられる。しかし公共の利益と負担を配分することに配分の正義が存在する。資本主義は交換の正義で効率性を担保し経済成長を図ろうとする。小さな政府の議論でもある。配分の正義で経済を動かそうとするのが社会主義だと考えられる。大きな政府の議論ともいえる。また公共善の観点から法的正義を主張する人々もいる。我々は良いという言葉を使い、善という概念を忌避する傾向があるのではなかろうか。特定の人が乱用するのは論外であるが、愛・善・正義という概念がキャリア

デザインを考えるうえでも重要な論点であることには変わりはない。

（日本人が陥りがちな五つの主義）

日本人は本源的には個人主義であるといわれる。しかし集団主義的な社会では優等生的な行動をとる。次に掲げる五つの特異なものの方をしよう。そのような傾向があり、お互いに行動を縛りつけてきたのではないか。このことは肝に銘じておくべきだろう。第一は正解主義、全ての問題には正解があると考えてしまう。答えがないところから始まるのが常識である。第二は、理論信仰・神話化、である。日本人は、理論やハウツーが好きである。しかもそれを信じてしまう。理論はある条件の下でしか当てはまらないことを肝に銘ずるべきだ。原発の安全神話が典型である。明確におかしいことが分かっている。またコストも他のエネルギーに劣ることもわかっているがその道を疑うことなく突き進む。第三は、合意主義である。個別主義に徒党主義を優先させる。契約など一度決めたことは本来変更しない。集団で顔を見合わせてみんなが良いというなら簡単に決定をひっくり返す。そのようなことが頻繁に起こる。あれだけ議論して論理的にも詰めて結論を出しているにも関わらず雰囲気が変わると変更してしまう。「みんながよいといった」ことと過去に決定したこととは違う。第四は、文字通り集団主義である。個において集団を優先するし、集団にゆだねることが好きである。自分で責任をとらない裏返しである。第五は、無謬主義。日本人は失敗を許さない。時間をかけ完璧に仕上げることには意を用いる。ベンチャー企業が育たないのはこの主義が影響しているように思えてならない。一度失敗するとリカバリーが難しい社会を作ってしまった。失敗したほうがキャリア的には有利となる欧米とは異なる考え方である。

（三段跳び人材育成は可能か）

明治以降 140年、日本人は近代革命を起こした欧米人に比肩すべく変革の努力を怠っていたように思われる。彼らに比し 3段階の遅れをとってしまったのではないか。

第一段階は明治維新時である。文明開化・殖産興業のもとに実施された近代化ではあるが、森鴎外が安普請といい、夏目漱石が皮相上滑りの開花といったように欧米の近代の精神を理解しなかった点である。物質的な近代化には成功するが、個人をベースとし個人の尊厳を第一とする個人主義社会ははまだ実現していない。明治維新は、時の権力が人々の心まで支配した。日本人の精神のよりどころは、結局は天皇を神とし頂点に仰ぐ一種の宗教共同体に遷移したのではないか。欧米人が到達した「こころ」の近代化はできていないのである。

第二段階は戦後である。天皇の人間宣言に始まる社会の再構築が行われたが、人々の心のよりどころは会社共同体に遷移しただけではなかったか。天皇共同体が会社共同体にすり替わったに過ぎなかった。麗しい組織共同体は集団主義的拘束の強いものとなり、欧米の個人主義とは程遠い、過度のえもいわれぬ拘束的平等社会を創造してしまったように映る。（社会主義的な）平等な配分原理が優先し対等な人間関係がもたらす交換原理を忘れてしまっているのではないか。

第三段階は、現下に進行する ICT 革命の加速化にともなう問題である。パスワード的に言うと、ABCそして IOT（モノのインターネット）である。ABCとは AI(人工知能)でありブロックチェーン（分散型台帳技術）、クラウド・コンピューティングである。ICT 技術、とりわけブロックチェーンは自律分散の社会インフラを実現し、社会は根こそぎ再定義しなければいけなくなるといわれている。それは、分散型の社会システムの上に、個人の自立生活を奨励し、組織もマネージャをも不要とする（ホラクラシ、オルフェウスの原則）ものだ。欧米諸国がすべからく地域分権型の連邦組織で個々人が自立する市民として生活空間をマネージしている。そこに ICT で自律分散型の社会システムを導入し、さらなる社会の効率化・公正化・安定化・オープン化を目指している。北欧諸国ではすでに ATM を廃止し貨幣をも不要のものとしている。日本人は、優秀な官僚の指示を

仰ぎ、律儀で従順な民として自我を抑制し、秩序ある社会を、中央集権の社会システムの上に構築している。そして、それを是とする人々である。

今や、アングロサクソンの人々とのものの考え方・発想とは三つの段階の差ができています。また、資本主義が何たるかを知る中国の人々と比べても差があるように思われる。この3段階を克服しないと行けない。日本人に三段跳び的飛躍が期待できるのであろうか。そのための人材育成には人文学を修め感性あふれる人間形成が必須である。そのような人材でないと新しい時代にイニシアティブをとって行動に移せない。彼らは時代の求める専門性に対する吸収力・モチベーション力をたぎらせる人材である。それはとりもなおさずキャリアデザイン学が目指す人材である。人文学を修め、感性あふれる逆 T 字型人間であらう。

参考文献

Clayton M. Christensen, James Allworth and Karen Dillon, *How will you Measure your*

life?”, Harper Business 2012

Edited by Hugh Gunz, Maury Peiperl, *Handbook of Career Studies*, Sage Publications 2007

Edited by Michael B. Arthur, Douglas T. Hall and Barbara S. Lawrence *Handbook of Career Theory*, Cambridge 1989

阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』（ちくま新書 1996）

猪木武徳『経済学に何ができるか』（中央公論 2010）

小門裕幸、対談：笹川孝一、山田泉『キャリアデザインという自己変革・社会変革』泉文堂 2012

小門裕幸『アントレプレナーシップとシティズンシップ』法政大学出版局 2012

ジムグント・パウマン、奥井智之訳『コミュニティ』（筑摩書房 2008）

鈴木謙介『サブカル・ニッポンの新自由主義』（ちくま 2008）

渡辺京二『維新の夢』（ちくま学芸文庫 2011）

渡辺京二『日本近世の起源』（洋泉社 2011）